

宇沢美子 著

『ハシムラ東郷——イエローフェイスの  
アメリカ異人伝』



本書表題を飾る「ハシムラ東郷」とは？ 20世紀初頭、排日の嵐吹き荒れるアメリカ合衆国の新聞雑誌コラム上、滑稽な笑いをおとした社会批判で絶大な人気を誇った、白人風刺作家ウォラス・アーウィン作の「仮想／仮装の日本人学僕」——「ブラックフェイス」ならぬ「イエローフェイス」のキャラクターである。本書は、著者の10年に及ぶ膨大なアーカイヴ資料収集作業のもと、その「異人種装」の歴史的、同時代的意味を、「東郷」と同時代の「日本人騙り／語り」や、「東郷」の先駆、変奏、派生的画像と関連させつつ論じ問うものである。

以下の書評では特に、「東郷」の「異人種装行為」の両義性、すなわち通常オリエンタリズムか価値転覆行為かの、二極的に単純化して語られがちな「異人種装」を、「微妙な攻撃性」として両者の振幅のなかで問う、著者のスタンスに寄り添いつつ迫ってみたい。

本書のいう「微妙な攻撃性」の最たる例が、「東郷」の操る「東洋人英語」だろう。言うまでもなく、主流言説にあらわれるピジンは、人種的劣性を知的・社会的劣等へと結びつけ、その話し手を社会の規範・規格外とする、アジア系に対するもっとも一般的なステレオタイプである。本書はその危険に留意しつつも、もう一方でそれが笑いをおとした社会批判を可能にするための手段であることや、さらにはピジン自体の秩序破壊性に注目する。主流文法に縛られないピジンに価値転覆性を見ることが自体は特段目新しいものではないが、ここで著者が論じる、生物と無生物の分類を無効化し、範疇攪乱を起こす「東郷」風「擬人法」が、人と物の区別のみならず、西洋文明の文法に規定された人種的・文明的序列や「秩序」を、笑いとともに破壊する「異種混交」パワーを炸裂させる様は鮮烈だ。「東部の語彙では西部の生活を語るができない」とは本書で紹介されるマーク・トゥェインの考えであるが、「東郷」のピジンも、米国における非主流の現実を描き出し、主流英語の統語法に奇襲をかける（ために採用された）異邦人・移民の言語なのである。

しかしこういった異化作用としての異邦人語りは、別の西洋中心主義の危険も露呈する。たとえば、本書において「東郷」シンパを自認するトゥェインが、学僕「東郷」の「破格の英語」について、それが「創作されたもの」であったとしても「なんと説得力があることか」と絶賛し、「東郷」の日本人英語の「創作性」は「なんら問題ではなく」、「肝心なのはその効果」だと、むしろ「東郷」本人の「無邪気」さを称揚するとき、そこで前景化される「誰にとって説得力があり」、「誰にとっての効果」なのかという疑い（の不在）は、ここでの批判行

為が、白人男性による白人男性のための白人男性文明批判に「他者（の言語）」が動員・領有されるといふ、今も昔も変わらない自己中心的構図と傲慢さを思わせる。

しかし、本書のすぐれたところは、従来（特に初期）のマイノリティ研究にありがちだった、主流による言説行為をその自己完結性やオリエンタリズムゆえに全面批判し無効化するのではなく、「東郷」のイエローフェイスの社会批判の可能性を、そのオリエンタリズム的領有と共感、価値転覆性の振幅の、「矛盾を秘めた多様性」のなかで問うていることだろう。著者の言うように、アーウィンにとって「東洋人の学僕」というペルソナは、国家の底辺からアメリカ社会（特に家庭領域）を見る視点を獲得し、その批判主体となるための手段（それは特権に基づいた領有行為でもある）と同時に、アーウィン自身の苦学生給仕としての体験、階級的周縁性の上に立った共感的投影行為でもあり、さらには自身の安全を確保するための自己防衛の仮面でもあった。歴史に埋もれた資料の断片を、精緻な読みと軽妙な日本語で繋ぎ合わせる本書は、「東郷」=アーウィンの「イエローフェイス」という言説行為のアンビヴァレントな攻撃性を、その矛盾を孕む複層的現実から、丁寧にそして軽快に読み解いていく。（東京大学出版会、2008年10月、四六判 vi + 294頁、2,800円）

——中村 理香（成城大学准教授）